Volume. 3

復興応援企画

人とまちと、その先と―

ヴァイオリンが奏でるメッセージ

「津波ヴァイオリンコンサート＆ストラディヴァリウスコンサート」

陸前高田市の「奇跡の一本松」（伐採前）写真提供：陸前高田市

「復興応援企画」として、被災地の現在をお伝えする本連載。
第３回は、東日本大震災で発生した津波の流木と、
陸前高田市の「奇跡の一本松」から作られた「TSUNAMIヴァイオリン」を使用したコンサートをご紹介します。

流木から生まれたヴァイオリン

300年以上の長い歴史をもつストラディヴァリウスと、2012年に生まれたばかりの「TSUNAMIヴァイオリン」。この２挺のヴァイオリンを使用したコンサートが、2019年３月23日、常盤木（ときわぎ）学園高等学校のシュトラウスホールで開かれた。このコンサートの前半に演奏されたTSUNAMIヴァイオリンは、ヴァイオリンドクターの中澤宗幸（なかざわむねゆき）さんが東日本大震災で発生した津波の流木などの木材から製作したもので、作り手の強い思いが込められている。

◆

中澤宗幸さんは幼い頃、父親からヴァイオリン作りを教わり、長じて現在は世界中の演奏家や博物館から依頼を受けて、名器の修復やメンテナンスを行っている。東日本大震災で津波の被害に遭った物に宿る人々の思い出を後世に伝えるべく、ヴァイオリンの製作を思い立った。

中澤さんは、過去ヨーロッパにいたときに出会った、とあるヴァイオリンの横板にギリシャ語で書かれた詩に共感したことがあるという。「『私は山に立っていたとき、木陰で人を癒やし、今はヴァイオリンとなって人を癒やす』――。そう、木は切り倒されたあとも、人々に語りかけてくれるんです。本来ヴァイオリンを作るなら、ヨーロッパの材料が適しています。しかし、流木の中から探し、作り上げることが何より大事なこと」と心を決め、中澤さんは被災地へ向かった。

2011年12月、日當和孝（ひなたかずゆき）さん（岩手県久慈市在住・マルヒ製材専務）の案内で、無数に横たわる流木の中からヴァイオリンを製作できそうな木を探し歩いた。そして表板に松、裏板と横板には楓によく似た硬い木を使用し、１挺のヴァイオリンが出来上がった。

こうして生まれた楽器は「TSUNAMIヴァイオリン」と名付けられて、2012年３月11日、陸前高田市の合同慰霊祭で世界的ヴァイオリニストのイヴリー・ギトリス氏によって初めて奏でられた。

中澤宗幸さん

中澤さんはこのTSUNAMIヴァイオリンを千人のヴァイオリニストに弾いてもらうべく、「千の音色でつなぐ絆」と題したプロジェクトを開始した。プロ、アマを問わず、さらにクラシック音楽だけでなくジャンルを超えて、このヴァイオリンを千人のヴァイオリニストに弾き継いでもらおうという試みである。

復興への願いを込めて

この日行われた「津波ヴァイオリンコンサート＆ストラディヴァリウスコンサート」のプログラムの前半は、まず中澤宗幸さんによるお話から始まり、映像とともにTSUNAMIヴァイオリンの製作について語られた。次にTSUNAMIヴァイオリンによる演奏となり、中澤きみ子さん（ヴァイオリン）と碓井俊樹（うすいとしき）さん（ピアノ）によって、ヴィタリーによる『シャコンヌ』とシューベルト『アヴェ・マリア』が奏でられた。聴衆は真剣にステージを見つめ、その音色に耳を傾けた。

休憩後の後半は、名器ストラディヴァリウス「ダ・ヴィンチ」（1714年製）を使用してヴィヴァルディ『四季』より〈春〉第1楽章、ベートーヴェン『スプリングソナタ』より第1楽章、モンティ『チャルダッシュ』などが演奏され、コンサートを華やかに締めくくった。

コンサートを終えて演奏者にインタヴューすると、「TSUNAMIヴァイオリンを弾くたびにいつも胸がいっぱいになり、目頭が熱くなります。慣れることはありません」と中澤きみ子さん。碓井さんは「多くの復興支援コンサートに出演していますが、TSUNAMIヴァイオリンを使用した演奏会には、毎回特別な思いがあります。このヴァイオリンは多くのかたに弾き継がれていますが、毎回音色が変わっていく一期一会的な側面ももっています。聴衆の懐に、より深く入っていけるように臨みました」と語った。

◆

このプロジェクト「千の音色でつなぐ絆」は被災地の人々の心に寄り添い、震災の記憶の風化を防ぐこと、さらにはいつ起こるか分からない災害に備えることを願ってきた。TSUNAMIヴァイオリンの完成から7年が過ぎ、

TSUNAMIヴァイオリンを演奏する中澤きみ子さんと、ピアノの碓井俊樹さん

現在は650人以上が演奏しており、中には何度も弾く奏者もいるので、演奏会の回数は1,000回を超える。また日本だけにとどまらず、世界16か国にも及んでいる。

「自分には何もできない」「音楽で何ができるのだろうか」――。東日本大震災後、何度も考えたことである。しかし今回取材で訪れた仙台では、音楽によって未来を見据えようとする人々の意志を強く感じた。人々の思いがある限り、TSUNAMIヴァイオリンはこれからもずっと、多くの人に弾き継がれ、音を奏で続けていくだろう。

文中の曲名はプログラムの表記にそろえています。

Column 1

奇跡の一本松

写真提供：陸前高田市

時は江戸時代に遡る。陸前高田市気仙町の広田湾に面した地に、人々は防潮林を育むため、松の植林を始めた。それから長い時間をかけて住民はこの松林を大切に守り続け、約7万本に増えた松たちもまた、高潮や潮風から彼らを守ってきた。美しく育ったこの場所、高田松原は約350年もの間、人々の憩いの場として存在し続けたのである。しかし2011年3月11日、東日本大震災の津波によってこの地は壊滅した。7万本あった松もほとんどが流されてしまったが、たった1本だけ、生き残った松があった。この松は「奇跡の一本松」と呼ばれ人々の心のよりどころとなっていたが、2012年5月、海水による深刻なダメージでの枯死が確認された。

その後、奇跡の一本松はモニュメントとして保存整備されることになり、伐採が決まった。現在は保存作業を経て、再び元の場所に立てられている。

Interview

コンサートを終えて

碓井俊樹さん、中澤きみ子さん、中澤宗幸さん

── TSUNAMIヴァイオリン製作のきっかけはどのようなことでしたか？

中澤宗幸：東日本大震災のあと、自分も何かできないかと考えていました。そんなとき、妻（きみ子さん）に「津波の被害で倒壊してしまった家屋の柱や流木は、たくさんの家族の思い出と歴史が詰まっていると思う。その思い出で、ヴァイオリンは作れないの？」と言われたことがきっかけです。流されてしまった物たちが処分されてしまったら何も残らない。この中の木材が形を変えてヴァイオリンとなり、人々を励ますことができたらいいなと思って製作を決めました。

── 出来上がったヴァイオリンを初めて手にしたときはいかがでしたか？

中澤きみ子：これまでに向き合ってきたヴァイオリンに対する思いとは、違う感情を抱きました。演奏しながら作曲家の思いを感じて胸がいっぱいになることはありましたが、大きな悲しみに自分が思いを寄せるということは、長い人生で初めての経験でした。

── 演奏してみていかがですか？

中澤きみ子：TSUNAMIヴァイオリンは新しい木でできているので、なかなかなじみにくかったです。「とても強く生き抜いてきた木」という印象で。しかし年月がたつにつれて、音色も楽器の状態もどんどんよくなっています。ヴァイオリンは弾き手によって変化する楽器ですから、たくさんの人々の、心からの思いを受けているのですね。

碓井俊樹：TSUNAMIヴァイオリンができた頃から、このヴァイオリンと共演しています。その頃に比べると音がとても深くなってきました。絶え間なく弾き継がれているので、毎回音色や楽器のコンディションが変わります。その点が普通のヴァイオリンと違うところです。お客様の反応も昔に比べ、音色を聴いて涙されるかたが増えたように感じています。

── この先TSUNAMIヴァイオリンには、どのような未来があるとお考えですか？

中澤宗幸：300年、400年と生き続けるヴァイオリンの寿命に比べて、私たちはずっと早く命の終わりを迎えます。TSUNAMIヴァイオリンは、たとえ私たちがいなくなっても、これから先何百年、記憶を風化させないために音を奏で、人々にメッセージを伝え続けなければならない。それが、このヴァイオリンの役割です。

碓井俊樹：これまでたくさんの聴衆のかたに、音色を聴いていただいています。ヴァイオリンの寿命は数百年。TSUNAMIヴァイオリンもまた、数百年という長い年月にわたって弾き継がれていくことでしょう。世界ではTSUNAMI（津波）が国際語になっており、このヴァイオリンの歴史の一部を演奏によって共有できるのはとても意義深いことです。この言葉が世界に認知されることは、多くの命が救われることにもつながります。これからも日本だけではなく、世界中で演奏され、より多くの人に聴いていただきたいと願っています。

中澤きみ子：奏者が変わっても、楽器が伝えるメッセージはいつの時代も変わりません。ストラディヴァリウスのように、このヴァイオリンが300年以上長く生き続けることで、きっと多くのことを語ってくれることでしょう。

中澤宗幸：東日本大震災から８年という年月がたちました。日々の忙しさで記憶が風化し、今ではあの出来事を人ごとのように感じて過ごしている人が多いかもしれません。ですが、震災はいつ自分の身に起こるのか分かりません。このヴァイオリンの音は、自然災害への警鐘を鳴らすものでもあります。この先もずっとTSUNAMIヴァイオリンは、人々に語りかけ続けてくれると信じています。

Column 2

TSUNAMIヴァイオリン

奇跡の一本松が保存整備のために伐採されたとき、その松の木片を使って中澤さんはヴァイオリンの重要な部品である魂柱（こんちゅう）を製作し、このTSUNAMIヴァイオリンに使用した。裏面には、復興を願って奇跡の一本松の姿が描かれている。

Ｉ挺のTSUNAMIヴァイオリンが完成したのち、TSUNAMIヴィオラとTSUNAMIチェロも製作された。ヴィオラは天皇陛下（2013年の演奏時は皇太子殿下）、チェロは世界的チェリストのヨーヨー・マ氏によって、それぞれ初めて演奏された。現在はヴァイオリン４挺、ヴィオラ２挺、チェロ２挺の計８挺の楽器が出来上がっている。

上野耕平の

crossing［クロッシング］

第4回

愛知県名古屋鉄道パノラマsuper

魅せてくれる列車。

僕がこよなく愛す名古屋鉄道。なかでも特急列車に使われる1200系パノラマsuperは、見晴らしの良い展望席が特徴の花形車両だ。運転席の上に客席がある構造で、小田急ロマンスカーなどに代表される他の展望席とは一味違う。薄い壁を隔てたところにある運転席からは、運転士の指差喚呼（しさかんこ）の声やブレーキハンドルからのノイズが聞こえる。普通の車両からいつも見ている景色でも、この車両に乗るといつもと違く魅せてくれる。

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

第28回日本管打楽器コンクール サクソフォーン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等のメディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学の非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ぱんだウインドオーケストラコンサートマスター。

Information

上野耕平がコンサートマスターを務める「ぱんだウインドオーケストラ」のCD『PANDASTIC!! Live2016』（日本コロムビア）［2,500円＋税／COCQ-85296］が好評発売中。

〈収録曲〉アルフレッド・リード『アルメニアン・ダンス パートⅠ』、ジョージ・ガーシュウィン（旭井翔一編）『ラプソディ・イン・ブルー』、ジェイムズ・バーンズ『詩的間奏曲』、フィリップ・スパーク『宇宙の音楽』

編集部メモ

名古屋鉄道（名鉄（めいてつ））は、愛知・岐阜両県に路線を有する私鉄。総路線距離は444.2kmで、日本の私鉄では近鉄、東武に次いで第3位の長さを誇る。

「パノラマsuper」の愛称をもつこの特別車は、1988（昭和63）年にデビューした特急専用車で、前面展望を満喫できるハイデッカー展望席が特徴。名鉄岐阜〜名鉄名古屋〜豊橋を結ぶ名古屋本線の快速特急や特急などで運転されており、豊橋側の先頭車両のみが展望車となっている。展望席を含む特別車に乗車する場合、特別車両券（ミューチケット）が必要。

「パノラマsuper」は、このほかの路線でも運行されています。

シンガーソングライター
半崎美子（はんざきよしこ）が

あなたの学校へ歌いに行きます！

＝ 特別レポート ＝

“ショッピングモールの歌姫”として話題のシンガーソングライター、
半崎美子さんが、全国の学校を訪ねる「あなたの学校へ歌いに行きます！」プロジェクト。
2019年春の旅立ちの季節に合わせて、
未来へ羽ばたく生徒たちを応援したいという半崎さんの願いで実現しました。
今回は、その中の一校、栃木市立大平南中学校の
「３年生を送る会」で行われたコンサートをレポートします。

半崎美子（はんざき・よしこ）
北海道出身のシンガーソングライター。全国のショッピングモールを回り、歌で対話を続けていくうちに、歌声や歌詞、生き方に共感する人が増え、17年の下積みを経て2017年4月にメジャーデビュー。NHKみんなのうた『お弁当ばこのうた～あなたへのお手紙～』や『サクラ～卒業できなかった君へ～』などを収録したミニアルバム『うた弁』がロングヒット。“ショッピングモールの歌姫”として数々のメディアで取り上げられ、第50回日本有線大賞新人賞を受賞。自分の歌が自分自身よりも長生きすることを願い、歌が教科書に載ることが一つの夢である。

Information

母への感謝を綴った4th Single『母へ』
（日本クラウン）
［1,111円+税／ CRCP-10426］が好評発売中。

半崎美子オフィシャルサイト

まるで故郷に帰ってきたかのような、ほっとした笑顔で舞台に登場した半崎さん。実は２年前、生徒たちが小学生だったときの「６年生を送る会」でも、半崎さんのコンサートが行われていたのです。半崎さんは中学生になった彼らの姿を見ることができるのを心待ちにしていました。

再会を喜ぶ懐かしい雰囲気の中、１曲目の『種』が歌われました。この曲は、「命のつながり」を歌ったもので、2011年の東日本大震災のあと、半崎さんが宮城県石巻市を訪れたときにつくられました。「種」というものは、それ自体に移動する能力はないけれど、風や虫、動物たちが運び、命をつないでくれる。そのつながりの尊さをテーマにした歌です。

２曲目は、NHK「みんなのうた」で放送された『お弁当ばこのうた～あなたへのお手紙～』です。お母さんが台所で包丁をトントンする音から始まるこの歌は、半崎さんがご自身の母親を思い出しながら書いた作品。心や体が弱っているときでも、お弁当を通してずっと寄り添ってくれたエピソードが歌詞になっています。中学校の３年間、温かく見守ってくれた保護者のことを思い浮かべながら聴いていた生徒も多くいたことでしょう。

続いて演奏されたのは、未来に向かう生徒たちへのメッセージが込められた『明日（あす）への序奏』。先が見えずもがき続けているとき、それは助走であり、序奏なのだということ。助走を助走とも思わずに走り続けていれば、いつか飛べる日が来るということ。今やっていることは決して無駄ではないという、半崎さんの強い気持ちが伝わる歌でした。

笑顔で歌う半崎美子さん

コンサートが盛り上がってきたところで生徒会のメンバーが登場し、半﨑さんへの質問コーナーが始まりました。「半﨑さんにとって歌とは何ですか？」という質問に対して、「歌は人と人との出会いをつなぐもの。今日ここで出会えた皆さんも、かけがえのない宝物です」と答えた半﨑さん。聴き手の一人一人を大切に想う姿勢が印象的でした。

すっかり打ち解けた空気の中、生徒たちも一緒に『サクラ～卒業できなかった君へ～』を合唱しました。生徒、先生、保護者のかたがたが、それぞれの思いを抱えて卒業を迎える中、世の中にはさまざまな理由で卒業がかなわなかった人もいます。誰かの心の中に生き続けている人にも届くよう、願いを込めて演奏されました。

生徒会のメンバーによる質問コーナー

生徒たちと一緒に合唱

最後に、ある男子生徒から質問があがりました。「17年間の下積み時代があったと聞きましたが、つらいことをどのようにして乗り越えましたか？」── 一瞬の間を置いて、半﨑さんはこう答えました。「音楽活動をする中で、あなたは歌に向いていない、やめたほうがいい、という声をもらうこともありました。そんなとき、誰の言葉に耳を傾けるかが、とても重要です。私は自分のことをよく知らない人から言われた言葉よりも、信頼している友達や先生、家族の言葉を信じるようにしてきました。」

半﨑さんの答えは、卒業してそれぞれの道に進んでいく生徒たちへのエールのようにも聞こえました。目標に向かっている途中で壁にぶつかったとき、そばにいる大切な人の存在に助けられることがあるかもしれません。そんな身近な人への感謝の気持ちを歌った『感謝の根』という曲で、コンサートは締めくくられました。

生徒たちから贈られた寄せ書き

Interview

コンサートを終えた半﨑さんにお話を伺いました。

Q 今日のコンサートで いちばん印象に残ったことは何ですか？

最後に男子生徒がしてくれた質問です。生徒たちは皆ノリがよくて元気いっぱいでしたが、きっとそれぞれに切実な思いや悩みがあるはず。彼が勇気を出して質問してくれて、私がそれに答える形で、これから旅立っていく生徒たちに一本の筋を残せたことがうれしかったです。

Q 学校訪問コンサートでは、どんなことを伝えたいと意識されていますか？

中学生は多感な時期なので、「一生懸命にやるのは照れくさい、恥ずかしい」と感じる生徒も多いと思います。だからこそ、「一生懸命はかっこいい」ということを堂々と伝えたいですし、「今を懸命に生きている」ということを、ステージを通して体現していきたいと思っています。

※コンサートで歌われた『明日（あす）への序奏』の合唱楽譜（混声三部）が、
本誌の姉妹誌『音楽教育 ヴァン vol.40』に掲載されています。

One day, one moment

［ワンデー ワンモーメント］

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

6枚目

力をもらえる場所

初夏の信州。風が吹くと、枝先の葉っぱが水面をかすめて揺らめく。

多忙な日々に疲れた時、誰でもそれぞれに、ふと思い出す懐かしい景色があるのかもしれない。私にとって、それは信州なのである。

ゆったりと走る農作業帰りのトラクターや、鉄管ビールと呼びたくなる程おいしい蛇口の水、農協で売っている安くて新鮮でピチピチの野菜、雪をかぶる八ヶ岳。

でも一番は、子どものころ、家族で歩いたこの散歩道。行けばいつでも、変わらない姿でそこにある。また風が吹き、葉っぱが揺れる。静かな道を歩いていると、葉擦れの音、虫や鳥の声が包んでくれる。ここを歩くと再び、体の中に力が湧いてくる気がする。

ヒダキトモコ

写真家。日本写真家協会・日本舞台写真家協会所属。
東京都出身、米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。会社員を経て写真家に転身。音楽誌・経済誌等の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャルカメラマン。ステージ写真、ジャケット写真、写真集等。
官公庁や企業の撮影も多数。撮影スタンスは自然体、人の内面的な魅力やイキイキとした写真表現を大切にしている。
http://hidaki.weebly.com

次代につなぐ
06
校長先生の講話

本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第6回は、「子どもが作る“弁当の日”」の提唱者である竹下和男先生が、校長時代に中学生へ向けて語ったもの。食育を通して子どもたち一人一人の成長を見つめてこられた竹下先生による、温かくも本質に迫るお話です。

竹下和男（たけした・かずお）
子どもが作る“弁当の日”提唱者

第６回　竹下和男 先生（綾川町立綾上中学校 第13代校長）

“弁当の日”

“弁当の日”は2001年に香川県の学校で始まりました。
これは、子どもが自分で弁当を作って学校に持ってくるという取り組みです。
この弁当には点数をつけません。
自分で作ることによって、子ども自身の「伸びようとする力」を引き出すことが目的です。
“弁当の日”の体験を通して、自己肯定感や感謝の気持ちが芽生え、
人に喜んでもらえたときのうれしさを知る。
それらは生きるための原動力になります。

献立から買い出し、料理、弁当箱詰め、片付けまでの弁当作りを皆さん一人一人が行う“弁当の日”を、この学校でもスタートさせました。私にとって“弁当の日”の実施は３校目になります。“弁当の日”を初めて行った滝宮小学校でも、前任校の国分寺中学校でも、そしてここ綾上中学校でも、私のところに保護者のかたがたから同じような意見が届きました。

それはこんな意見です。「弁当を作ることができない子がかわいそうだ」「弁当を作れなくて、欠席したらどうするのだ」「弁当を見せっこしたとき、見劣りするおかずの子がいたらかわいそうだ」「学校給食があるのだから、特定の子が目立つ“弁当の日”はしないほうがいい」。

どの意見も、「わが子がかわいそう」とは言っていません。「かわいそうな子に配慮してほしい」と訴えているのです。さて、この体育館にいる全校生徒の中で、“かわいそうな子”って誰でしょう。

“弁当の日”に反対するかたがたに、私はこう答えてきました。「学校給食は１年間で約185回です。毎日３食食べると１年間の食事は1095回になります。ですから、１年間の食事のうち、910回は自宅で作られた食事を食べていることになります。１年間で３回の

竹下先生が“弁当の日”を初めて実施した綾南町立（現・綾川町立）滝宮小学校の児童たち。
対象は5・6年生で、弁当作りに必要な基礎知識は家庭科でサポートした

“弁当の日”に自作弁当を持ってくることができない生徒が、あとの910回の食事をきちんとできていると思いますか。私は910回の食事をちゃんと食べる力を、中学校を卒業するまでに身に付けてほしいのです」。

ご飯とみそ汁の朝食を作ることができる高校生は全国で1％だというデータがあります。日本では、「食事を作るのは子どもの仕事ではない」と考える親がほとんどなのですね。そして、食事を作ったことのない子どもがそのまま大人になり、わが子に食事を作れない親が増えているのです。

「親が作ってくれた食事を、今までに一度も食べたことがない」という子どもを、私は何人も見てきました。それは心身の成長にプラスになるとは思えません。では、どうしたらよいのでしょうか。親が作ってくれないのなら、「あなたたちが作れる人になる」のです。

“弁当の日”を始めてから、「親が忙しいときには夕食を作って待っている」という例もたくさん出てきています。こうしたよい変化が起こっているのです。1年間でたった3回の“弁当の日”。少々失敗してもいいから、チャレンジすることが大切です。失敗の中から学んだことは、生きる力につながります。

私のところに届く、保護者のかたがたからの意見は、もし“弁当の日”を実施しなければ出てこなかったでしょう。つまり“弁当の日”を始めたことで波風が立っているのです。でも私には、「かわいそうな子を想って、“弁当の日”をしない」という主張は、「かわいそうな子は、かわいそうなままでいなさい。それは学校の責任でも仕事でもない。見て見ぬふりをしよう」という考えにも聞こえます。

そうした反対意見に、真剣に向き合ってみませんか。自分のクラスで、自分の学年で、全校生徒の中で、反対するかたがたの言う“かわいそうな子”を一人も出さないために、自分たちでできることを考えましょう。仲間と相談し、クラスで話し合い、そして行動しましょう。

私は、そうした訴えで起きた波風の中であなたたちが育ってほしいと思っています。波風が立っているからこそ育つ力があるのです。

思い出の“弁当の日”

大人になった教え子たち

2020年秋より公開予定!

映画

『弁当の日』

“弁当の日”を取り上げたドキュメンタリー映画。
台所に立った子どもや若者がどのような発見をして、自身を取り巻く環境が
どう変わっていくのか。「子どもたちが幸せに生きることのできる社会をつくりたい」
という願いが込められた作品です。九州地方の学校などで撮影が行われており、
来年秋に完成、全国で自主上映される予定です。

映画『弁当の日』
オフィシャルサイト

vol.5 World Report [ワールドレポート]

身の丈は自分でつくる

内なる声に耳を澄ましたジャズ・ピアニストの挑戦

浅井岳史さん

ニューヨークを拠点に活躍を続けるジャズ・ピアニストで作曲家の浅井岳史（あさいたけし）さんが歩んできた道は、実に不可思議です。本格的なピアノの教育を受けることなく、ビジネスマンとして渡米。しかし、そこには本人も想像したことのない世界が待ち受けていました。これも一つのアメリカン・ドリームなのでしょうか？ ニューヨークにある浅井さんのスタジオでお話を伺いました。

ジャズ・ピアニスト＆作曲家。バークリー音楽大学ピアノ科卒業。ニューヨークで10年以上演奏活動を続けている実力派ピアニスト。トリオの定期演奏の他、ソロピアノ、デュオ、室内楽でも活躍中。従来の作法にとらわれず、古楽、古典、現代音楽、ポップス等、多様な音楽要素を取り入れたピアニズムが世界で高く評価される。フランス、UK、オーストラリア、アジアに加え、新境地のエレクトリック音楽でエジプトのツアーにも出かけるなど、グローバルで多彩な音楽家である。www.takeshiasai.com

運命のいたずら

ピアノは子どもの頃、音楽教室に通ったぐらいで、ほんのちょっと。ピアノと再会したのは中学２年のとき、ビートルズとの出会いが決定的でした。当時の音楽雑誌の表紙にリチャード・ティーが載っていて、なぜか「僕はピアニストになるんだ！」なんて思ったりして。Cメイジャーのスケールも弾けなかったのに、ですよ。すごい思い込みですよね。でも僕は習ってもいないのに不思議とコードの感覚を理解することができました。ある種の音感のようなものだったのかもしれません。だから、もしかしたらやれるかなって、密かに（笑）。

アメリカに来て約25年になります。大学を卒業してから日本でIT企業に入社しましたが、一流のビジネスマンになりたくてアメリカへやって来ました。ところが偶然、ウィスコンシン大学のジャズバンドのピアニストに誘われたんです。「君、ピアノ弾けるなら一緒にやろうよ」と。そうしたら、ありえない話ですが、バイエルも弾いたことのない僕が賞をもらったのです。

僕の運命はさらに狂い始めます。ビジネスマンとして極めて重要なTOEFLの試験日に本番を入れてしまったのです。もちろん迷いましたが、心の中では「コンサートしかない」と思っていました（笑）。こうして偶然の産物から僕の音楽家としてのキャリアが始まります。

でも僕は自分に足りないものがあると分かっていました。基礎力です。このとき初めて音楽教育というものを受けました。５年間、バークリー音楽大学に通い、やったことはひたすらクラシック。バッハを弾きまくりました。もちろん通常のジャズの授業も受けましたが、生活の95％ぐらいはクラシックでした。特にバッハの即興性と構成力に魅せられたのです。

ライヴでの演奏風景（©Nicole Mago）

内なる声に導かれて音楽家の道へ

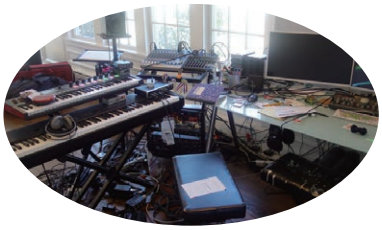
バークリーを卒業したとき、僕は35歳になっていましたが、自分の実力ではプロへの道には歯が立たないと感じ、再びビジネスマンになりました。それで仕事を頑張っていたら、マイクロソフト社からヘッドハンティングを受けたのです。僕はかなり悩みました。何しろマイクロソフトの本社があるのはシアトル。でも僕はプロでなくとも、とにかくこのニューヨークの音楽文化の中で生きていたい……。そんなときです、「フルタイムの音楽家になりなさい」という内なる声を聴いたのは。

無謀にも僕はヘッドハンティングのオファーを断り、何の保証もない音楽家への道を歩み始めました。最初の仕事は音楽学校の教師。半年間、1人の生徒のためだけに通いました。1年後には何とか教師として生活できるようになり、教え子からはシンガー・ソングライターも生まれました。気が付くと、僕は50歳になっていました。

でも教師としての活動だけでは、ジャズ・ピアニストとして成功したとは言えません。そんなとき、また「自分の実力を試しなさい。まずは海外に出なさい」という内なる声を聴きました。不思議な経験でした。そして偶然にもフランスのピアニスト、カトリーヌ・シュナイダーと出会い、フランスを中心にセッションをするようになりました。

最初のコンサートを行ったのはアングレームという街。そこは、ニューヨークを最初に発見したイタリア人の冒険家ヴェラッツァーノのスポンサーとなったルネサンス期のフランス国王、フランソワ1世の本拠地です。それゆえにニューヨークの最初の名前は「ヌーヴェル・アングレーム」でした。歴史に呼び出されたような、不思議な縁を感じます。そのアングレームで演奏しているうちに、フランス人のドラマーやベーシストとトリオを結成することになり、ボルドーやパリなどにも活動の場が広がっていきました。そして、その間に発表した4枚のCDがニューヨークでの出世作となったのです。フランスからニューヨークに逆輸入された形ですね。今もこうしてニューヨークのクラブで演奏できるのは、フランスでの活動があったからです。

自分自身を賭けた“calling”


浅井さんの仕事場

ニューヨークは競争の激しい社会です。そして層が厚い。正直、ブルーノートのレコーディング・アーティストでも副業がないと厳しい。しかし、ここで生活しているとハイレベルなパフォーマンスに耳が順応し、いつの間にか「耳がニューヨーク」になります。だから世界中どこへ行っても通用するようになる。これが僕たちの誇りなのです。

僕のスタジオがあるウェストチェスターは全米でいちばん所得税の高い地域と言われています。よく「すごいですね」と言われますが、僕は自分自身を賭けているのです。もちろん現状の「身の丈」には合っていないのかもしれません。でも僕はここに住んで、ここにマッチした音楽をつくりたいと思っています。身の丈を自分でつくりたいのです。

中学生のときに気付いた「ある種の音感のようなもの」がときどき天と呼応し、一瞬にして曲が舞い降りてくることがあります。僕はそれをキャッチして作品へと昇華させる。そんなとき、必ず誰かが感動してくれます。僕はものすごいテクニックを持ち合わせているわけではありませんが、テクニックだけで人の心は動きません。天から与えられた力を使って、僕の音楽を一生懸命に演奏し、感動してもらう。それが自分のミッションだと思っています。

人にはそれぞれミッションがあります。でも、それは自分ではよく分からない。それを教えてくれるのは先生であったり、友達であったり、僕のように内なる声であるかもしれない。誰でも必ずそれを聴くチャンスがあるはずです。ぜひ、子どもたちにもそれを聴いてほしいのです。天職のことを英語で“calling”と言います。僕はこれからも向こうからやってくる“call”に耳を澄まして生きていきたいと思っています。

取材・構成：坂元勇仁
（レコーディング・ディレクター）

ウェストチェスターにあるご自身のスタジオで演奏する浅井さん